

北澤 毅 著
『「いじめ自殺」の社会学
—「いじめ問題」を脱構築する』

世界思想社 2015年 四六判 272頁 ¥2,400(税抜)

越川 葉子

本書は、素朴な実態論に基づいて議論されることの多い「いじめ問題」の解決に向けて、「ことばが現実をつくる」という構築主義の視座が、極めて刺激的で有効な手立てを提供することを教えてくれる格好の書である。ややもすれば厳格であるがゆえに閉塞的な方法論との印象を抱かれがちな構築主義のイメージを刷新するかのごとく、本書は、われわれにとっても馴染みのある報道番組やテレビドラマを素材にしなが、緻密に練り上げられた実証的な分析を経て、「いじめ問題」に対する新たな知見をあざやかに描き出す。本書は、構築主義という学術的な知が「いじめ問題」の解決に向けた根拠のある対応策を導き出す分析視角になることを読者に教えてくれると同時に、社会を動かす知となりうることをもまた教えてくれるのである。

「いじめ問題」に関心を抱き、本書を手にした読者は、「いじめ」に対する常識的な感覚を覆す認識と出会うことになる。本書は冒頭で、この社会から「いじめ」はなくならなだろうとの認識を表明したうえで、だからこそ『「いじめ」問題の解決とは、いじめをなくすことではなく『いじめ苦自殺』をなくすことである』(p.3)と明言する。それゆえ、「いじめ苦」を内包した「いじめ自殺」を根絶する方法の探究こそが「いじめ問題」の解決につながるとする認識は本書の通底をなす。では、「いじめ自殺」を根絶する方法の探究とは、いかにして実現可能であるのか。本書はこの問いに対して、他に類をみない実証性をもって応えていく。

その第一の成果は、「いじめ苦」とは、「いじめ」から必然的に導かれる帰結ではなく、「社会文化的に作られたもの」(p.2)であるとの立場か

ら、「いじめ」が「いじめ苦」と結びつく構築過程を歴史的に丹念にひも解いてみせたことにある。「いじめ苦」という感情経験を社会文化的な構築物としてとらえ直し、その解体をめざす試みは本書の核心をなすといつてよい。本書の第3章では、今日、「いじめ自殺」事件の象徴とされる出来事を報じた新聞とテレビ番組を詳細に分析しながら、1980年代半ばに「いじめ自殺」が社会問題化していく過程が明らかにされる。とりわけ、従来のいじめ研究が明言を避けてきた「いじめ問題」の成立条件や時期を実証的に検証することで、1985年の後半に「いじめ」が単独で自殺の動機となる社会が成立することが明らかにされる。この点は、本書が従来のいじめ研究と一線を画す特筆すべき成果の一つといえよう。

第二の成果は、「いじめ問題」の当事者性を担う人びとの経験とはいかなるものなのか、現代日本社会における「いじめ言説」空間のなかで、彼らはどのような実践をし、当事者であるがゆえの困難に直面しているのかが当事者の語りの分析から明らかにされる点にある。当事者が自らの「いじめ」経験をどのように意味づけしているのかがわかれば、経験の意味づけがもたらす苦しみから当事者を解放する手立てが導き出せるのではないか。その一つの試みとして、終章では、テレビドラマ『わたしたちの教科書』(フジテレビ 2007)に描かれる語りの分析を通して、「いじめ苦」に囚われている子ども自らの手による「自己物語の書き換え」実践が「いじめ苦」からの解放の手立てとして提案される。本書が方法論に裏打ちされた綿密な考察を重ねてきたからこそ導かれる、ささやかな、しかし「いじめ問題」の解決に向けた新たな突破口となりうる道筋が示されるのである。

だが、本書の試みはここで終わらない。こうした実践的な対処法の先に、本書は、現に「いじめ」で苦しんでいる子どもやかたつて「いじめ」に苦しんだ子どもが自らの経験を読み解く分析視角を手に入れ、社会に向けて経験を語り出す契機となることを信じて本書を読者に託すのである。その成果は本書とともにわれわれの手にもまた委ねられている。